

## 末代無智章

末代無智の・在家止住の男女たらんともがらは、こころをひとつにして・阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず・一心一向に仏たすけたまえと申さん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも・かならず弥陀如来はすくいますべし、これすなわち・第十八の・念仏往生の誓願のこころなり、かくのごとく決定してのうえには・ねてもさめてもいのちのあらんかぎりは、称名念仏すべきものなり、あなかしこ あなかしこ

〔御文章 ひらがな版〕 一四四～一四五頁

### 【大意】

末代といわれる末法の時代にあつて、智慧もなく、在家の生活をおくる人びとは、専ら阿弥陀仏をふかくたのみたてまつるべきであります。そして阿弥陀仏以外の仏さまや菩薩がたにこころを向けることなく、また神々にこころを向けず、ひたすらに阿弥陀仏の本願の仰せにしたがい、仰せのままに「おたすけください」とおまかせするならば、どれほど罪業が深い人であっても、阿弥陀仏は必ずすくってください。これが第十八願の念仏往生の誓願のおこころであります。このように本願の信心を決定したからには、ねてもさめても、いのちのあらんかぎり……、お念仏を申すべきであります。

### 【語註】

在家止住 在家の生活をしているもの。

第十八の念仏往生の誓願 阿弥陀仏が菩薩であったときに立てた四十八の願の中の第十八願。この願において、阿弥陀仏は、すべての衆生に信心を与え、念仏させて浄土へ往生させようと誓われたから、念仏往生の願という。

## 末代無智

「末代」とは、自力の仏法が宗教としてのはたらきを失うといわれる末法の時代ということです。悪に無感覚になった社会を意味する「濁世」という語と共に「末代濁世」などと用いられます。